

Book Review 7-3 北海道を扱った小説 #愚か者の石

『#愚か者の石』（河崎秋子著）を読んでみた。北海道別海町生まれ。北海道に纏わる小説を数々執筆している。北海道の自然や動物を扱っている。『颯風の王』、『肉弾』、『土に贖う』、『鳩護』、『絞め殺しの樹』、『鯨の岬』、『清浄島』等。2023年度の直木賞を受賞した。

明治18年初夏、Sは北海道の樺戸集治監（月形にあり、札幌医大での幌内へのリクレーシヨンの帰りにここの温泉で疲れを癒した）に収監された（徒刑13年）。マンガ『ゴールデンカムイ』にも登場する。そこで二児の殺人の罪で収監されているYに出会う。Yが隠し持つ一粒の白い石の存在が彼の過酷な日々を支えていた。収監所を移動する中で、二人は様々な苦労を共にする。その後、収監されていた部屋の火事とともにYは姿を消す。明治30年に仮放免となったSは、Yの行方を、再会した看守のNと探すことになる。その過程でYの罪の真実を知る・・・。

本書に出て来る収監所を二つ紹介する。その一つ樺戸集治監は、1881（明治14）年に置かれた北海道初の集治監。もう一つ標茶集治監は、1885（明治18）年に建てられた。北海道開拓のために連れてこられた多くの囚人たち。彼らが周辺の工場や倉庫での労働、道路の建設などを行っていた。北海道の収監所巡るツアーもあるようだ。

著者は、自然と動物を描いたら右に出る者がいない作家であると私は思っている。今回は、北海道の監獄に収監された二人の男を描いているが、秀作ではあるが、他の作家の作品とあまり差がないという印象である。やはり河崎秋子氏には熊や馬、土に関することをあの独特の視点で描いてほしい。